

東日本大震災からみるコミュニティ再生に向けた  
ソーシャルワークのあり方に関する研究  
—自治会会長へのインタビュー調査から—

法政大学大学院 安西 美咲 (会員番号 009787)

キーワード 3 つ: 災害ソーシャルワーク・地域喪失・レジリエンス

## 1. 研究目的

2011年に発生した東日本大震災は、未曾有の災害と言われており、親しき人の喪失だけでなく、家屋や今まで長年住んできた地域そのものも喪失した。このような状況の中で人々はどのようにして喪失体験を乗り越えたのか。Bonanno (2009) は喪失に対する悲嘆の経験は必ずしも誰もが経験するものではないと述べており、喪失によって人々には「災害等の出来事が生じてしまったら可能な限りそれに対処し巧みに立ち向かう、喪失の苦痛を耐え忍ぶ能力」であるレジリエンス (resilience) が見られると主張している。

本研究では、東日本大震災において地域を喪失した人々は、一概に「悲嘆」の経験として語るができないのではないかと仮説のもと、どのようにその喪失に対処してきたのかを明らかにすることを目的としている。中でも喪失経験から間もない時期に積極的にコミュニティの構築に向けて活動された方々に焦点を当て、地域の喪失の経験からコミュニティ再生に向けたプロセスを明らかにし、喪失に対する「レジリエンス」が地域の喪失の経験にも当てはまるのかということを検証すると共に、そのプロセスにおけるソーシャルワークのあり方を検討することを目的として実施した。

## 2. 研究の視点および方法

本研究は、東日本大震災で被災され、仮設住宅において自治会長等の役割を担っていた方 10 名に、2016 年 5 月から 7 月の間にインタビューを実施し、質的データ分析法により分析を行った。震災発生当日から現在に至るまでの気持ちの変化や、コミュニティ構築にあたっての活動等について伺った。

分析方法は、逐語記録を細かく区切りオープン・コーディングを行った。オープン・コーディングから抽象度が高い概念におきかえコードをつける焦点的コーディングを行い、焦点的コーディングで生成したコードを再度整理し、【カテゴリー】を生成した。

## 3. 倫理的配慮

この研究は、法政大学大学院人間社会研究科の研究倫理委員会の承認を得て、許可された研究計画に従って実施した。対象者へは、本研究及びインタビュー調査の主旨に理解いただき、目的や内容についての同意を得ている。また、調査結果は、個人名が特定されない形で分析を進め公表することについて同意を得ている。

#### 4. 研究結果

インタビューで聞き取った内容を①震災当日②震災発生直後③仮設住宅入居初期④仮設住宅居住期⑤復興住宅入居期の5つの時期に分け、コミュニティ再生に向けたプロセスを整理した。震災発生当日から震災発生直後の時期においては、先行研究で示されている喪失の経験がみられていた。

仮設住宅入居初期では個人的な【仮設住宅での生活に対する不安】を抱えながらも【行政や住民等からの声掛けがきっかけで役員へ】就任する。そのことがコミュニティ再生のきっかけとなり、新しいコミュニティの構築に向け、住民たちの活動が活発になっていった。それにより自治会長自身の【コミュニティ構築への思い】が強くなっていく。一方で、【丸投げの行政による自治会長の負担】があったが、【コミュニティ活動に対する気持ちの支え】によって乗り切っていた。しかし、復興住宅への入居に向け、仮設住宅でのコミュニティは再び喪失されてしまう。そのことは、【仮設住宅と同じ課題を繰り返す復興住宅】という不安の広がりにつながり、自治会長等には【自治体政策として必要なコミュニティづくり】という考えが出てくること明らかになった。

#### 5. 考察

地域の喪失の経験に対する対処としての「レジリエンス」について検討した結果、コミュニティ再生に向けてレジリエンスを発揮する環境が整い、活動のきっかけを得たことにより、新しいコミュニティの構築に向けてレジリエンスを発揮したことが明らかになった。レジリエンスは元々持っている能力とされているが、それは周りの人との関係性や環境により強化されるとも言われている。本研究からも、地域の喪失の経験からコミュニティ再生に向けて「レジリエンス」を発揮し活動することで、さらに強化されたことがわかる。

一方で、本研究ではそのレジリエンスを高めたのは自治会長自身であったこともわかった。コミュニティ再生に向けた政策等の環境が整わない中で、活動に対するやりがいを見出し、尽力したことにより、新しいコミュニティでの住民同士の関係性が少しずつ構築され、その関係性に自分自身も支えられていたのである(ヘルパー・セラピーの原則)。

本研究により、災害等による地域の喪失においては、コミュニティ再生に向けたプロセスへの継続的な介入と、キーパーソンとなる自治会長等に寄り添い協働しながら「レジリエンス」を高める環境を整え強化し、ソーシャルキャピタルのあるコミュニティづくりを進めていくことが、ソーシャルワークのあり方として示唆される。

#### 【引用・参考文献】

George A. Bonanno (2009) *The Other Side of Sadness : What the New science of Bereavement Tells Us About Life After Loss* (=2013,高橋祥友監訳『レジリエンス—喪失と悲嘆についての新たな視点—』金剛出版.)